

『とはずがたり』における自己造型に関する一考察  
：『夜の寝覚』の影響をめぐって

著者	阿部 真弓
出版者	法政大学国文学会
雑誌名	日本文学誌要
巻	74
ページ	2-12
発行年	2006-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/9383">http://hdl.handle.net/10114/9383</a>

〈論文〉

『とはずがたり』における自己造型に関する一考察

—『夜の寢覚』の影響をめぐって—

阿部 真弓

はじめに

拙稿は、『夜の寢覚』からの影響という観点から、『とはずがたり』における後深草院二条の自己造型について、些かながら論じるものである。

『とはずがたり』における先行文学の影響に関してはすでに優れた成果が蓄積されている現在、あらためてこうした問題について論じるのは、もはや陳腐といった感もあるが、ただ、『夜の寢覚』との関係については、従来、何故か等閑視されてきたように思われる。<sup>①</sup>しかし、作者が自己をいかに造型したかを考察する際、この問題とはじっくり取り組む必要があると考えている。なぜなら、二条と『夜の寢覚』のヒロイン中君との間には、奇妙といえるほど多くの類似点を見出すことができ、中君の人物像が二条の自己造型に深く関わっていることがうかがえ

るからである。

私がかつて、『雪の曙』の人物造型に見られる『夜の寢覚』の影響を考察したことがあり、<sup>②</sup>本稿ではそこから得られた結論も踏まえて、考究を試みたい。

—

『とはずがたり』巻一の冒頭に、後深草院が二条の実家を御幸し、初めて彼女と契りを結ぶ場面がある。

①ただうち臥したるままにてあるに、添ひ臥したまひて、さまざまうけたまはり尽くすも、「いさやいか」<sup>③</sup>とのみおぼゆれば、「なき世なりせば」と言ひぬべきにうち添へて、「思ひ消えなむ夕煙、一方にいつしかなびきぬと知られむも、あまり色なくや」など思ひわづらひて、つゆの御答へ

## 『とはずがたり』における自己造型に関する一考察

も聞こえさせぬほどに、今宵はうたて情けなくのみあたり  
たまひて、薄き衣はいたくほころびてけるにや、残る方な  
くなりゆくにも、世に有明の名さへ恨めしき心地して、

心よりほかに解けぬる下紐のいかなる節に憂き名流さ  
む

など思ひつづけしも、心はなほありけると、我ながらいと  
不思議なり。

(二〇四～二〇五頁)

「夕煙」とは、後深草院の寵愛を受ける直前に求愛を受けて  
いた「雪の曙」(西園寺実兼)を思い浮かべての言葉である。

後深草院の寵愛を受けつつも、二条の心中を占めていたのは「雪  
の曙」であった。

松本寧至氏は、①の場面をあげ、「このあたりは明らかに『夜  
の寢覚』の帝闖入事件の条りの寢覚の上の心理である」とし、  
「二者択一に迷う心理、一方から求められて、他の存在の重み  
を認識する心理は、まさにこの物語によるものである」と指摘  
された。また「煙」を用いた表現も、『夜の寢覚』をヒントに  
したものであろうと、首肯し得る見解を示しておられる。松本  
氏の論考はきわめて示唆に富むものであったが、ただその類似  
性を指摘するにとどまっている感もないではない。本節では、  
自照表現における『夜の寢覚』の影響力についても考察すべく、  
この①の場面について、検討を進めていくこととする。

①は、傍線部「心はなほありけると、我ながらいと不思議な  
り」の解釈をめぐり、本作品の自照性の問題とも関わって、多  
くの検討・考察が重ねられて来た重要な場面でもある。傍線部

について、「雪の曙」への愛情を再確認したと解釈する時代も  
あったが、現在では、混乱の中にありながら理性がまだ残って  
いたと解釈するのが定説となっている。次掲の引用のごとく、  
『とはずがたり』には同種の文辞が繰り返されており、各文脈  
を勘案すると、そのように解釈するのが適切だからである。

②「余りにつれなくて、年も隔てゆくを、かかる便りにてだ  
になど思ひたちて。今は人も、さこそ知りぬらぬに、か  
くつれなくて、いかがやむべき」と仰せらるれば、「さ  
ればよ。人知らぬ夢にてだになくて、人にも知られて、一  
夜の夢の覚むる間もなく、物をや思はむ」など案ぜらるる  
は、なほ心のありけるにやとあさまし。(二〇〇頁)

③「この世ながらにては」など、心あてに見つづくれども、  
それとなきを見るにぞ、同じ水脈にも流れ出でぬべくはべ  
りし。

浮き沈み三瀬川にも逢ふ瀬あらば身を捨ててもや尋ね  
行かまし

など思ひつづくるは、なほも心のありけるにや。

(三九〇頁)

本来、身の処し方も判断できない状況に置かれているにもか  
かわらず、暗鬱たる未来を予測しつつ、時に歌を詠むほど冷静  
な人間として自らを描き、さらに、あたかも第三者のように自  
己を評する。これらの場面について、標宮子氏が「昔物語の女  
主人公として自己を造型している」と述べておられるが、確か

に、リアリズムを指向したというよりも、物語的な構築を感じさせるところである。また、標氏は、『とはずがたり』の語りの特徴は、「語りの基点と作品世界を同日と見なし、しかも（一人称）で語る叙述のスタイルを採っている」こととした上で、「緊迫した事態のただ中であつて自己の心情を叙述しようとする本場面（②）を含む、後深草院の最初の御幸を指す 稿者注）では、今まで（私）に身を預けていた語り手が表に現れ、作中人物と語り手、二様の（私）の間に乖離が生じている。（中略）しかし作者は作中人物と語り手、両者の露な分裂を辛うじて食い止める。というのには『なほ心のありけるにやとあさまし』という表現は、実は語り手の感想でありながら、作中の主人公が『われながら』あきれたことだ』と訝しがる自省の表現でもあるからである」と、興味深い解釈を提示されている。

①②③の「心はなほありける」「なほも心のありけるにや」といった表現そのものについては、次に示す『狭衣物語』の登場人物による自己批評を取り入れたものという森留美子氏の指摘もある。

④ 楫を絶え命も絶ゆと知らせばや涙の海に沈む船人

添へてける扇の風をしるべにて返る波にや身をたぐへ

まし

と思ひ続けらるるも、物のおぼゆるにや、我ながら心憂く、悲しきこと、限りなし。

（一四〇頁）

この他、『源氏物語』御法巻や『いはでしのぶ』巻二等に類

似表現が散見することが、三角洋一氏により指摘されている。<sup>⑦</sup>

こうして、「心はなほありける」に類した表現そのものは、先行物語の蓄積の上に成立した言説であることが明らかになりつつあるが、ただし「狭衣物語」等の表現と『とはずがたり』との間には、なお幾段階かの階梯が存在するといわざるをえない。

例えば、④は飛鳥井姫君が絶望の淵で死を決意しようとしているところ、また『源氏物語』御法巻では、光源氏が紫上を失い、悲嘆にくれる中、葵上死去時の悲しみと照らし合わせる場面に「なほ物の覚えけるにや」とあり、『とはずがたり』の①とは、前提となる状況からして異なっている。『いはでしのぶ』巻二の類似表現については、内大臣の通いが間遠くなった伏見大君が、思いがけず帝の寵愛を受ける場面にある。

⑤ 「ひとすぢにいまはちぎりのあさからでうきにむかし

は思ひわすれね

いく夜までとか、げになをなぐさまぬ心いられも、かつは、  
かばかりもいとほる、身にこそはあらめ」など、さまざまの給はするも、さすがにきこゆるは、心のあるにやと、われながらうとましきにさす。<sup>⑧</sup>

うつ、ともゆめともわかずおもひづるむかしもいまもうきにきえつ、

（二四〇頁）

右の場面は状況的にも『とはずがたり』に近似しており、注目される内容を持っているが、ただし、この場面の「心のある

にや」は、文脈から考えて、歌を詠むことのできる理性の存在を表すにすぎない。また、④⑤において、そうした理性や判断力は、「心憂く」「うとましき」ものとして、捉えられている。

一方、『とはずがたり』①の「心はなほありける」は、単に、冷静に詠歌できるという理性のありかたに對してだけではなく、和歌によつて表出された二条の心情、および詠歌に至るまでの道程に對しても発せられた言葉と解釈されるものである。すなわち、後深草院との對比によつて明確に認識されていった「雪の曙」に對する慕情、しかし、自らの意志でなく、「心よりほかに」結ぶこととなつてしまつた後深草院との契り、自分がこの世に生き長らえていると噂になることさえ恨めしく思う気持ち、さらに院との關係が、「雪の曙」にも他の人々にも知られ、「憂き名」を流すこととなつていくであらう自分の運命等々、置かれた状況と繊細な心の動向を確かに辿ることができてしまつた、明晰な理性と思考力が、自らに内在していたことを指すものである。

『とはずがたり』の「心はなほありける」は、『狭衣物語』等の先行物語から獲得した表現であるとしても、それらとは本質的に異なることもまた明白であり、両者を直ちに結びつけることには違和感を覚える。やはりここで重要なのは、緊迫した状況下で自己の心のたゆたいを明確に認識し、表現できる人間として自己造型した上で、さらに〈語り手〉としての二条が、そうした自らを省みて、「我ながらいと不思議なり」と人間の心理を不可思議なものと捉え、驚き、怪しみつつ、自己批評している点である。

さて、こうした問題を考察する上で看過できないのが、『夜の寝覚』巻三の帝闖入事件、およびその直後における中君の自省である。ここでその描写について、細かく見ていきたい。

義理の娘に付き添つて参内した中君がいる弘徽殿の一室に、帝が忍び入り、彼女を捕らえてかきくどく。

かきくらさるる心まどひのなかにも、「あないみじ。内の大臣の聞きおぼさむことよ」とは、ふと、おぼえて

(二七〇頁)

「あなあさまし。よろづにのたまふに、いかにも、我が動くべくもあらぬに、おぼしわづらひ、つひに宮の構へたまふことのさまや。など。かくてはまた、内の大臣に、いかなることを言ひ聞かせたまふらむとすらむ。なにし、やむごとなき基を見ながら、我はこよなき劣りざまにて、交じらむかたをこそ、すべてあるまじきことにも、あながちにもかへ離れつつ、恨みらるれ。それよりほかに、つゆも怠りありて、聞き疎まれむな。おほかたにとりても、あるまじきことなりしに、我が心にもあらずもてなされにし藻塩の煙は、命を限るまでおぼえしを、まいてこの際は、『いささかのまよひこそありけれ』と聞こえむ恥づかしさ」を思ふに、なほ消えぬ、わびしくて、「明日までありと聞こえずもがな」とぞ、思ひまどはるるや。

(二七三―二七四頁)

「内の大臣に言ひ聞かせたまはむことは、ただ同じことなれど、我が心の問はむにだに、心清く、底の光をかこつか

たにも」と思へば

(二七四―二七五頁)

「内々の曇りなさは知らず、かばかりもおはしますは、やがて、流れての濡衣となりなむること」と思ふに、なべての世の人聞きなどまでもただ今はおほえず、内の大臣に、「あな、思はず」と、うち聞きつけられたらむ恥づかしさ、苦しさに

(二八〇頁)

緊張と惑乱の中で、中君は自らの深層に潜む、姉の元夫であった男主人公内大臣への慕情を明確に認識せざるをえず、眼前の帝をよそに心的世界へと埋没していく。帝と大皇の宮の間に陥ったことを悟り、「明日まで生きているとも知られたくない」と心を乱し、今夜のことが内大臣に知られることに對して、懊惱する。しかしその一方で、いずれ内大臣に知られるのなら、帝とのことは、けつして自分の過失や迷いからではなかったのだと申し開きができるようにしておきたいと、思いを巡らすのである。

帝は思いを果たせぬままに朝を迎えてしまい、立ち退かざるをえなくなる。帝の別れの歌に、ようやく生き返る心地の中君は、「いかにうき名を流すことか」と次の和歌を返すのである。

涙のみ流れあふせはいつともうきにうき添ふ名をや流さむ  
(二八四頁)

かくの如く、『とはずがたり』①での二条の心情の流れと、『夜の寝覚』帝闖入事件における中君のそれとは、寸分の狂いなく

寄り添うものであることが見て取れる。

また、従来指摘されていないようであるが、この帝闖入の場面には、①の「薄き衣はいたくほころびてけるにや、残る方なくなりゆくにも」に近似する、

いみじう心強う、引きくくまれたる単衣の関を、引きほころばされたる絶え間より、ほのかなる身なりなど、つぶつぶと丸に、うつくしうおほえて  
(二七七頁)

という文辞も存在しており、強い影響関係が認められよう。<sup>②</sup>

さて、こうした類似点に加え、『夜の寝覚』でさらに注目したいのは、帝闖入事件直後、中君がこの夜のことを客観的に振り返り、自分の心の動向について自省することである。

いみじかりつる心地のまどひのなかにも、まづ、『あないみじ。内の大臣、いかに聞きおぼさむ』と、うちおほゆることのみ、先に立ちつるも、今思ふぞ、あやしき。  
(二八九頁)

正気を保てないほどの切迫した状況でありながら、まず心中に鮮烈に浮かび上がってきたのは内大臣への思慕。そうした心の揺れを明確に認識した上で、その心理状態の不可思議さを述べる「今思ふぞ、あやしき」は、中君の心中思惟ではあるが、自らの深層心理の発見を、驚き、訝しみを抱きつつ語るもので、ここでは、そうした自己批評は、〈語り手〉による草子地的役

割をもって機能している。まさに、『とはすがたり』の語りの特徴の原型とも言える営為が、ここに見出されるのである。

緊迫した状況下でも、心情の推移を的確に把握する理性を有するとともに、さらにそのような心理状況を客観的に眺望するという二条の人物像の設定には、『夜の寝覚』が重要な役割を果たしているのではないか。『夜の寝覚』は、『狭衣物語』を始めたとする先行物語と『とはすがたり』との懸隔、飛躍を埋め補う存在としてあったのだった。

さて、こうした二条の自己造型の問題で、もう一つ興味深い点を指摘しておきたい。①の場面では、後深草院との対比により、『雪の曙』への思慕が認識されているが、『雪の曙』との情事、たとえば彼との新枕の際には、

長き夜すがら、とにかくに言ひつづけたまふさまは、げに唐国の虎も涙落ちぬべきほどなれば、岩木ならぬ心には、身に代へむとまでは思はざりしかども、心のほかの新枕は、御夢にや見ゆらむと、いと恐ろし。(二三八頁)

と、逆に、後深草院が二条の胸中に去来するのである。また、次掲の場面は、『有明の月』に対する思いを深めていく箇所であるのだが、そこでもまず、後深草院と自らの関係を殊に強調させながら、叙述する方法をとっている。

仰せに従ふにしあらねども、今宵ばかりもさすが御なごりなきにしあらねば、例の方ざまへ立ち出でたれば、もしや

と待ちたまひけるもしるければ、思ひ絶えずは本意なかるべしとかやおぼえても、ただ今までさまざまうけたまはりつる御言の葉、耳の底に留まり、うち交したまひつる御匂ひも袂に余る心地するを、飽かず重ぬる袖の涙は、誰にかこつべしとおぼえぬに(三五八頁)

眼前の男性をよそに、他の男性の存在の大きさを再認識するという二条の人物像。契りを結びつつも、冷静な一面が覚醒しているという造型が、パターンを僅かにずらしつつ、数々に展開されていく。

『夜の寝覚』の中君も、帝闖入事件の際には、男主人公に対する思慕を明確かつ強烈に認識していた。しかし、あれほど恋しく思った男主人公にいざ逢ってしまうと、次に掲げることく亡夫の老閨白を懐かしく思い出してしまうのであった。

「ほのかなりしを、かけ離れ思ひ出でしこそ、人より殊なりと、心をとめてあはれも深かりしか、なかなか、かかるにつけても、もし長らふる命もあらば、恨めしき節多く、心劣りしたまふべき人ぞかし」と思ふに、亡き昔のみ恋しく、「我は我」とうちながめられて、

山の端の心ぞつらきめぐりあへどかくてのどかにすまじと思へば(四八八―四八九頁)

ところが、老閨白の存命時には、男主人公を思慕していたようなのである。

げに、人がらの、なべてならず目やすきとばかり見知りにしに、こよなうさだ過ぎたまへりし、世のつねの人さまに、ひき移され、我が身をば恥づかしう、かなしう思ひ入りしほどに、憂きを知り始めしばかりにこそ、をりをり堪へぬあはれをば見知り顔なりしかど  
(三八八頁)

以上のように、眼前の男性に一種の嫌悪感を感じ、他の男性に対する意識、思慕を強める中君の性質は、『夜の寝覚』に類出する。そして、そうした性質は、対男主人公、対老閨白と思慕の対象を移行させながら、繰り返して語られていく。

同種のパターンを、僅かにずらしながら積み重ねていく螺旋的構造。『とはずがたり』は『夜の寝覚』から、そうした手法をも獲得したと推測されるのである。

## 二

二条の自己造型における『夜の寝覚』の影響は、第一節に論じた箇所以外にも諸処に認めることができる。各々、興味深い問題を有していることががわかれるのだが、紙幅の都合もあるため、それらについては、別に考察することとして、本節では簡単にではあるが、『夜の寝覚』という物語が二条を惹きつけた要因について、考えてみたい。

大倉比呂志氏は、二条の育った環境や内面のあり様、「雪の曙」の子を出産する場面について、『夜の寝覚』との類似を指

摘した後、「ではなぜ作者二条は『とはずがたり』執筆に際して、『夜の寝覚』に照準を合わせたのだろうか」と問いかけられ、その答えとして、毅然と帝を拒絶した中君に対して、彼女と対照的な性格の二条が憧憬を抱いたのではないかと述べられている。しかし、私は、さらに、より根源的な要因があったのではないかと考えている。

二条は自分の出自について、たびたび言及している。『とはずがたり』巻一にある、後深草院から東二条院への手紙を引用してみよう。

四歳の年、初参の折、「わが身位浅く候ふ。祖父久我太政大臣が子にて参らせ候はむ」と申して（中略）太政大臣の女にて薄衣は定まれることに候ふうへ、家々面々に、我もと申し候へども、花山・閑院、ともに淡海公の末より、次々また申すに及ばず候ふ。久我は村上の先帝の御子、冷泉・円融院の御弟、第七皇子具平親王よりこの方、家久しからず。  
(二七五―二七七頁)

二条は、実質的には母方の四条家に世話になることが多かったようであるが、しかし、むしろ父方の血筋、村上源氏の流れを汲む久我家の者であることを大変に誇りとしていた。また、右の書状にあるように、出仕の際に、二条は久我太政大臣源通光の猶子となったのだともいう。ただし、諸注が指摘するように、通光は二条誕生の十年も前に没していた。しかし、こうした一見奇妙な事象は、逆に、「そのような資格は全く名前だけ



## 『とはすがたり』における自己造型に関する一考察

にすぎないのであるが、その名にあくまでもこだわるのがこの時代の貴族社会<sup>1)</sup>であり、「彼女が、自分は太政大臣の孫娘で猶子であるという自意識をずっと持ち続けていた<sup>2)</sup>」ということを照らし出すのである。

二条は、二歳で母と死に別れた後、父の愛にはぐぐまれて成長した。しかし、その父とも十五歳の時死に別れ、庇護薄い「孤児」となってしまう。精神的にも経済的にも不安定な立場に置かれ、それは、二条の男性遍歴（特に近衛大殿の場合）の原因の一つともなる。

さて、二条は芸術的才能に恵まれた女性であり、和歌や絵に對して、かなりの矜持を持っていたようであるが、それ同様、いやむしろそれ以上に、琵琶の腕に自負を抱いていた。

琵琶は、七つの年より雅光の中納言に、初めて楽二つ、三つ習ひてはべりしを、いたく心にも入らでありしを、九つの年よりまたしばし御所に教へさせおはしまして、三曲まではなかりしかども、蘇合・万秋楽などはみな弾きて、御賀の折、白河殿荒序とかやいひしことにも、「十にて、御琵琶を頼りて、いたいけして弾きたり」とて、花梨木の直甲の琵琶の紫檀の転手したるを、赤地の錦の袋に入れて、後嵯峨の院より賜はりなどして、折々は弾きしかども、いたく心にも入らでありしを

(三一 九頁)

このように、「三曲まではなかりしかども」としながらも、琵琶の名手で秘曲伝受の記録も残る後深草院から琵琶を習い、

後嵯峨院より琵琶を下賜されたことまで記して、自分の技を暗に誇示しているのである。

さてそれでは、『夜の寝覚』の中君はどうであろうか。まず、冒頭部で彼女の素性が語られる。

そのものの根ざしを尋ねれば、そのころ太政大臣ときこゆるは、朱雀院の御はらからの源氏になりたまへりしになむありける。(中略) 帥の宮の御女の腹には、女二人おはしけり。形見どもをうらやみなくとどめおきて、競ひかくれたまひにし後

(一五―一六頁)

中君は、源氏である太政大臣の娘で、早くに母親を亡くしていた。そのためもあり、父の愛を一身に受ける中君であったが、十七歳の時、父親は出家する。父のいる広沢は一種の避難所となるが、父入道は中君の憂慮の原因を知らず、また次兄以外の兄弟たちは事情を知るが故に反目し、中君は心理的に孤立していく。中君は「孤児性」<sup>3)</sup>を有する女性主人公として描かれ、その家庭環境は彼女の内面形成にも大きく影を落とし、物語前半部はその複雑な人間関係を中心に展開していくこととなる。

さて父親は、大君には琵琶を、中君には箏の琴を教えていた。しかし、中君十三歳の年とその翌年の八月十五夜、天人が彼女の夢に現れ、琵琶の秘曲を伝授する。

「今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれに響き聞こえつるを、訪ね参で来つるなり。おのが琵琶の音弾き伝ふべき

人、天の下には君一人なむものしたまひける。これもさるべき昔の世の契りなり。これ弾きとどめたまひて、国王まで伝へたてまつりたまふばかり」とて、教ふるを、いとうれしと思ひて、あまたの手を、片時の間に弾きとりつ。

(二七―一八頁)

こうして、中君は、父大臣や姉大君が驚くほどの琵琶の腕前を獲得することとなった。

以上の点に着眼すると、その出自や才能からしてすでに、二条と中君には類似点が多いことが判明する。ともに源氏の出自であること、猶父・父が太政大臣であったこと、また琵琶の才能を持っていたことが理解されよう。そして彼女達は、不完全で屈折した家庭環境の中で、苦悩の道を歩み始める。このような原体験においても、二人は一致するのである。

また、不安定で幸薄い運命であったことを象徴する、両者の出産状況にも共通の特徴が見られる。二条が内密に「雪の曙」の子を出産、その女兒は直ちに「雪の曙」のもとに連れ去られるが、後に母子の対面を果たすという展開については、すでに『夜の寝覚』との関係が指摘されているが、それぞれの生涯における出産の状況を列挙してみると、きわめて酷似していることに驚かされる。『夜の寝覚』の欠巻部に相当する箇所については推定の域を出ないところもあるが、以下に整理しておく。

## 二条

### 第一子 後深草院の皇子を出産。

第二子 秘密裡に「雪の曙」の子(女兒)を出産。

第三子 懐妊の記事はあるが、出産についての記事なし。

第四子 後深草院認知の上、「有明の月」の子(男児)を出産。

第五子 縁ある人のもとに籠居し、秘密裡に「有明の月」の遺児(男児)を出産。

### 〈中君〉

第一子 秘密裡に男主人公(当時、姉大君の夫)の子(女兒)を出産。

第二子 夫の左大将(老閼白)認知の上、男主人公の子(男児)を出産。(欠巻部。『夜の寝覚』『改作本寝覚物語』による推定)

第三子 男主人公の子(男児)を出産。

第四子 男主人公の子(女兒)を出産。隠れ家においてか。(欠巻部。『寝覚物語絵巻』詞書による推定)

中君は二条と異なり、相手の男性は男主人公一人に限られているが、しかし右に示したように、彼女たちは、万人に祝福される出産は一度のみで、その他は特殊な状況下での出産を体験している。秘密裡に進行せねばならない、あるべからざる出産また、他の男性の子を生むことを夫が容認するという、きわめて特異な出産をも経験することとなってしまったのである。

二条と中君は、その出自や才能、生きざま等の点で酷似していることが、以上のことから理解できよう。二条は求めずして、「中君」たる要素をすでに兼ね備えており、中君の人生に共感

を覚えるところが少なくなかったのではないか。

そして、『夜の寢覚』<sup>15</sup>以前の物語にない「女主人公が視点人物となるという方法」は、さらに二条を惹きつける、魅力ある言説であったはずである。たとえば『源氏物語』や『狭衣物語』に比して、『夜の寢覚』は、「女性が自己を造型し、語る」という営為に、より近接した存在であった。もとより感情移入しやすい要因のある『夜の寢覚』を、自己を表出する「手段」として獲得し、自らの「物語」を紡ぎ出そうとしていたと推測されるのである。

### 三

未だ論を尽くせてはいないが、以上のことによって、『夜の寢覚』が、二条の自己造型に多大な影響力を持つ物語であったことが、次第に明らかになってきたのではないだろうか。

また、『夜の寢覚』からの影響を検討して気づかされることは、この物語が、とりわけ『雪の曙』をめぐる展開に深く関わっていることである。第一節で取り上げた①の場面しかり、二条の出産に関わる場面しかり、である。『雪の曙』の人物造型については以前に論じたが、彼の人物像は、『夜の寢覚』の男主人公の特徴を明確に描き出す要素によって構築されていた。一方、彼に相對する二条の自己造型には、かくのごとく、中君の姿が鮮やかに立ち現れる。

こうして『夜の寢覚』が、『とはすがたり』前半の構想や人物造型を支える礎石の一つとして機能していたことがうかがわ

れてくる。換言すれば、二条と「雪の曙」の恋物語は、新たな『夜の寢覚』として、『とはすがたり』の内部に再構築されたのである。「物語」と「日記」の交錯・往還については論を俟たないが、そこには、虚と実の狭間に漂うがごとき、「特異」な空間が構築されており、「影響」や「摂取」といった語による説明が可能であるのかどうか、もはや疑問にも感じられる様相が浮び上がってくる。

拙稿では、紙幅の関係もあり、間テクスト性の問題、物語引用論に今一步踏み込むことができなかったが、またあらためて別稿を設け、引き続き考察したいと考えている。

※本文の引用は以下による。

『とはすがたり』――『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはすがたり』（久保田淳氏校注・訳、小学館、一九九九年）

『夜の寢覚』――『新編日本古典文学全集28 夜の寢覚』（鈴木一雄氏校注・訳、小学館、一九九六年）

『狭衣物語』――『新編日本古典文学全集29 狭衣物語①』（小町谷照彦氏・後藤祥子氏校注・訳、小学館、一九九九年）

『いはでしのぶ』――『鎌倉時代物語集成 第二巻』（市古貞次氏・三角洋一氏編、笠間書院、一九八九年）

### 注

(1) 『夜の寢覚』からの影響に関する論考は、管見では、松本寧

- 至氏『中世女流日記文学の研究』本論第四章第四節「夜の寢覚」と「とはすがたり」(明治書院、一九八三年、大倉比呂志氏「とはすがたり」と後期物語」(『古代中世文学論考 第五集』、新典社、二〇〇一年)にとどまる。また、白水直子氏「とはすがたり」の述懐の方法について「侍りき」に注目して」(『甲南女子大学大学院論叢』一三、一九九一年三月)の末尾にて、その関係性が簡潔に述べられている。
- (2) 「とはすがたり」に見られる『夜の寢覚』撰取の様相―人物造型を中心に―(『詞林』一一、一九九二年四月)
- (3) 注1松本寧至氏論文。
- (4) 「とはすがたり」「なほも心のありけるにや」考―その自照表現のもたらされた背景を探る―(『女子聖学院短期大学紀要』六、一九七四年三月)。
- (5) 『中世日記紀行文学全評釈集成 第四巻 とはすがたり』(西沢正史氏・標宮子氏著、勉誠出版、二〇〇〇年) 巻一第三段評釈(語り手と作中人物、二様の〈私〉の乖離)。なお、①の「心はなほありける」の注にも「↓第三段評釈。」という指示がある。
- (6) 「とはすがたり」における自照表現の再検討―語り手の存在に注目して―(『名古屋大学国語国文学』五八、一九八六年七月)。なお、この論文では、『狭衣物語』は日本古典全書(朝日新聞社)より引用されており、そちらでは和歌の後は「なご思ひ続けらるるも、「物の覚ゆるにや」と我ながら心愛し。」となっている。
- (7) 『新日本古典文学大系50 とはすがたり たまきはる』(三角洋一氏校注、岩波書店、一九九四年) 七頁、注一九。
- (8) 注5前掲書の注では、「院に抵抗しながらも今後に思いを致す理性と、それをさらに和歌にまどめる冷静さと、二重の意味で。」(二二頁)とされている。
- (9) 諸注では、『狭衣物語』巻二で狭衣中將が女二宮と契りを結ぶ場面の「単衣の御衣もほころびて、あえかにをかしげなる御手あたり身なり肌つきことわりも過ぎて」との影響関係が指摘されるのみである。
- (10) 注1大倉比呂志氏論文。
- (11) 『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはすがたり』解説(五三九頁)。
- (12) 注11に同じ。
- (13) 永井和子氏「寢覚物語の「中君」―男性主人公から女性主人公へ―」(『源氏物語を中心とした論攷』、笠間書院、一九七七年)。
- (14) 注1松本寧至氏論文および大倉比呂志氏論文。
- (15) 三谷邦明氏「後期物語の方法 〈理念〉と〈語り〉あるいは源氏物語の呪詛」(『日本文学講座4 物語・小説1』、大修館書店、一九八七年)。
- (16) 注2前掲論文。

(あべ まゆみ・文学部助教授)